

# 男の子と父親

ジェームス・ドブソン



米国のビル・グラスという伝道者

者が、二十五年間毎週のように刑務所を訪れ、服役囚のカウンセリングを行なって来ました。それに

よると、面接した何千人の囚人の中、父親を慕う者は一人もいなかつたそうです。死刑囚の95%

は、父親を憎んでいました※1。

一九九八年に連邦刑務所ないし州刑務所に百二十万二千百七人が収監されましたが、94%は男性でした。死刑囚三四五二人のうち女性はわずか48人、つまり98.6%は男性ということになります

三十年前は、貧困と差別が、少年犯罪その他の問題行動の主な原因とされていました。今では、家庭の混乱こそ真の原因であること

が知られています。ハーバード大学の心理学者で「男の子」というもの」の著者ウイリアム・ポラック博士は、離婚は男女どちらの子にもつらいが、男子のほうがショッ

クが大きいと結論します※3。

男子に重要な二つの時期

少年が特に傷つきやすい時が、2度あります。

一番明らかなのは思春期の始めで、男女共に情緒的生理的に激しい変化の時期です。その時は男女ともに、父親が特に目を留め、導き、愛を注ぐ必要があります。その時期に両親が離婚すると、誰よりも男の子にはショックです。

しかし、ハーバード大学の教授キヤロル・ギリガン博士によると、もう一つ女子にはない大事な時期が男子の幼児期にあります。乳幼年期、男の子は母親の女らしさにふれて伸び伸びすごします。父親も大事ですが、まずは母親です。しかし、3~5歳頃の男子は、男としてのアイデンティティを確立しようと母親や姉妹たちから徐々に身を引きます※4。

これを、「分離と分化」と呼び

た。父の上背は一八〇センチ以上ありました。大きな手の平の感触を今も思い出します。

家の中で父と大騒ぎして遊んだこともあります。お母さん方はすぐ、「何をバカなことを!」と思うのですが、これが実は大切なんです。狼やヒョウの子たちがじゃれあうように、年に関係なく、男は騒ぐのが好きです。

5歳の時、父と力いっぱい蹴飛ばし合いをしては母を慌てさせたものです。そう、蹴飛ばし合いです。父は90キロで私は25キロでしたが、相撲取りよろしく真剣そのものでしたよ。父は「ほら、お父さんの向うずねをねらえ」とけしかけ、私が足をあげると靴の底でブロックします。私がむきになつてかかるつて行くと、父はつま先で私の向うずねをトントント叩くのです。

これが面白くて、足が傷だらけになるのも何のその、笑い転げました。母は、何が楽しいのか分からず、やめなさいと言うのです。男にしか分からないんですね、あの楽しさは。

今なら、子どもと蹴りあいつこする親は、幼児虐待で逮捕されるかも知れません。そういう「暴力」が、犯罪につながるという人もいるでしょう。同じように愛をこめて

てやつても、体罰は人を傷つけることを教えるようなものだと断言する人も多くいますが、そんなことはありません。少年たちが道を誤るのは、親と格闘技の真似をしてたり体罰をされるからではありません。それは、男性としての常識なんですね。狼やヒョウの子たちが父親がいないことが多いためなのです。

最近の自然界の発見からも、このことは言えます。犬の次に、動物で私の興味をそそるのは、象ですが、この巨大な生物は大変心優しく、驚くほど頭がいいのです。それで、文明の発展に追われるようになります。なにもしないサイを突き倒し、それから膝をついて牙で刺し殺してしまう。象

は、普通そんなことはしないので、原因は長いこと謎のままでした。

しかし、管理者たちは、ついに

真相を突き止めました。若い象の男は前で、女の子は後ろだよね?」自分はパパと同じだと言いたがつて、家族が車で出かけようとした時、息子が「ねえ、パパ、僕たちも一緒に、父親が特に目を留め、導き、愛を注ぐ必要があります。その時期に両親が離婚すると、誰よりも男の子にはショックです。

しかし、ハーバード大学の教授キヤロル・ギリガン博士によると、もう一つ女子にはない大事な時期が男子の幼児期にあります。乳幼年期、男の子は母親の女らしさにふれて伸び伸びすごします。父親も大事ですが、まずは母親です。しかし、3~5歳頃の男子は、男としてのアイデンティティを確立しようと母親や姉妹たちから徐々に身を引きます※4。

これを、「分離と分化」と呼び

ところが、ここで問題があります。その時期に父親が家にいませんか、いつも近づきがたく、子どもに距離を置く人だつたり虐待する人だと、少年たちは本物の男といふものをほとんど知らずに育ちます。少女たちは、父子家庭を除けば、女性らしいふるまいや態度を立派な模範が身近にあります。母親に育てられる少年は、男性としてのアイデンティティを築く手がかりはありません。そのため、親が早くに離婚すると、男子にはうに造られているのです。

ところが、ここで問題があります。その時期に父親が家にいませんか、いつも近づきがたく、子どもに距離を置く人だつたり虐待する人だと、少年たちは本物の男といふものをほとんど知らずに育ちます。少女たちは、父子家庭を除けば、女性らしいふるまいや態度を立派な模範が身近にあります。母親に育てられる少年は、男性としてのアイデンティティを築く手がかりはありません。そのため、親が早くに離婚すると、男子には

幼時期の父についての思い出は、豊かです。3歳の頃、母と家にいるとき、玄関にノックがありました。母が、にこにこして、「見て来てごらん」と言っています。ドアを開けると、父が立っていました。母が、にこにこして、「見て来て、私の手を引き、「いいものがいるから、おいで」と言いました。車が隠してありました。いやあ、車が隠してありますね。

同じ年のある日、父に手を引かれた私は、得意満面で散歩しました。

ます。ドン・エリアムによれば、「その時、内に組み込まれた成長計画に促され、男子は母親の巣を出て、父親の世界へとあぶない橋を渡り始めます」※5。

その時期、時にはもつと幼い時から、男子は父の注意を引き、父と関わりながら、その行動や癖をまねるのが普通です。

私の息子が小学校へ上がる頃、自分はパパと同じだと言いたがつて、家族が車で出かけようとした時の良い覚えています。たとえば、家族が車で出かけようとした時に、息子が「ねえ、パパ、僕たちも一緒に、父親が特に目を留め、導き、愛を注ぐ必要があります。その時期に両親が離婚すると、誰よりも男の子にはショックです。

父は前で、女の子は後ろだよね?」と言ったものです。私と同じ男だと言いたくて、私のふるまいや男らしさをまねているのがよく分かりました。男の子は、そういうふうに造られているのです。

と、私は言ったそうです。

「オテテ、ニギツテ」

父は暗闇をまさぐり、大きな手で私の手を包みました。握るや否

で、私の腕に力がなくなり、呼吸

は、深く穏やかになりました。すこにいるのを確かめたかつただけ

で、私の手を包みました。握るや否

で、私の腕に力がなくなり、呼吸

は、深く穏やかになりました。すこにいるのを確かめたかつただけ

不利です。

私の父との思い出

幼い時から父がそばにいてくれたことは、私にとって幸いでした。

2歳の頃1DKに住んでいて、私は、深く穏やかになりました。すこにいるのを確かめたかつただけ

で、私の腕に力がなくなり、呼吸

は、深く穏やかになりました。すこにいるのを確かめたかつただけ

\*1) Dave Simmons, Dad, the Family Counselor, (Nashville: Thomas Nelson Publishers, 1992), 112.

\*2) Bureau of Justice, Statistics of the Department of Justice. See <http://www.ojp.usdoj.gov/bjs>.

\*3) William Pollock, Real Boys: Rescuing Our Sons from the Myths of Boyhood (New York: Henry Holt and Company, 1998).

\*4) John Attarian, "Let Boys Be Boys--Exploding Feminist Dogma, This Provocative Book Reveals How Educators Are Trying to Feminize Boys While Neglecting Their Academic and Moral Instruction," The World and I, 1 October 2000.

\*5) Don and Jeanne Eilum, Raising a Son, (Berkley: Celestial Arts 1997), 21.

\*6) Michael D. Lemonick, "Young, Single and Out of Control," Time, 13 October 1997.

\*7) James Robison, My Father's Face: A Portrait of the Perfect Father, (Sisters, OR: Multnomah Press, 1997).

Excerpts from "Bringing Up Boys" pp.57-61. Copyright 2001 by James Dobson Inc. All rights reserved. Published by Tyndale House Publishers, translated with permissions of Tyndale House Publishers.